

http://www.minamih.net/



13・6・1(土)
南NEWS NO15

3年生 青梅FC・青梅2FC交流戦

○めあて	マッシュズを使って相手を抜く	全員シュートまで持っていく
対 青梅FC (15分ハーフ×2)		14-0
対 青梅2FC (15分ハーフ×2)		2-1
対 青梅FC (15分×1)		7-0
対 青梅2FC (15分×1)		5-0



一面芝のグラウンドでの試合。みんなのテンションも上がり気味で、試合開始。
○1試合目。キックオフのボールを三宅君が一人でフェイントを多用してドリブルでゴール前まで持って行くが、惜しくもゴールならず。相手ゴール前で団子状態からこぼれたボールに尾川君が反応し左足でゴール。コーナーキックのこぼれ玉に三宅君がすばやく反応し2点目。4分には、加々美君が右サイドからドリブルで持ち込み、キーパーの動きを確認し、空いているスペースにインサイドシュートで3点目。7分、前川君が持ち込んだボールをセンターリングし山本くんがボレーシュートするが、惜しくもゴール横へそれてしまいました。9分、前川君がゴールラインギリギリの角度のないところからシュートしてゴール。その後も終始、南のペースでの試合となりました。
○2試合目。相手のクリヤーボールが相手のオフenseに渡り、キーパーの尾川くんと1対1に、相手のドリブルミスもあり、ダッシュで戻って来た加々美君がボールカットし得点を阻止。みんなもしっかりも戻ってきてくれました。加々美君がゴール前のこぼれ玉をすばやく反応してゴール。自陣で相手ボールをカットした中田くんが、密集地帯をドリブル突破、惜しくもシュートまでは行けず。後半に入り2分、相手がゴール前まで持ち込み、キーパーと1対1になったが、キーパーの手が届かない場所へシュートされ失点。5分、三宅君が相手のボールを奪い、左足でシュートし2点目。8分には、野崎くんがハーフラインからドリブルで中央突破するが、惜しくもゴールならず。コーナーキックのボールに川上くんが右足で合わせ、シュートするが、相手デフェンスにぶつかってしまいゴールならず。

長友選手の言葉

5月29日朝日新聞夕刊
6月4日に行われる対オーストラリア戦に向けての合宿で全体練習後に走り込みを欠かさない長友選手が決意を次のように語っています。

豪州戦の勝ち負けの分かれ目は「戦術や技術ではない。勝ちたい思いをどこまで強く持てるか」だと考える。

少年サッカーでも同じです。日頃の練習から“自分に勝つ、見えない相手に勝つ、勝ちたい”と思う気持ち大切です。by 南のアンパンマン

○3試合目。小竹君がゴールエリア内で、ボールをとり、シュートするが、惜しくもゴールならず。1分、野崎くんが、ゴール前のこぼれ玉に合わせて、シュートしてゴール。この試合でも、中田君がセンターライン近くの密集地帯をドリブル使って5人抜きをしました。日ごろの練習の経過がでてました。その後も終始南ペースでの試合とありました。

○4試合目。平井君が、ゴール前まで持ち込んでシュートするが、惜しくもゴールポストにぶつかってしまい、得点ならず。しかし、そのこぼれ玉に山本君が反応し、シュートして2点目。キーパーの三宅くんも積極的に攻撃に参加していましたが、ゴールを奪うことはできませんでした。7分、デフェンス及びキーパーもドリブルで抜き去りゴール3点目。その後、2点取って試合終了。

今日の試合は、終始南ペースでのサッカーができました。ボールを持っている人のすぐ後ろをフォローするひとが、必ずついており、ボールをとられたとしてもすぐに奪い返していました。小竹君は、いつもボールが来るとすぐに蹴ってしまいましたが、今日は、積極的にドリブルを行っていました。その調子でどんどんどリブルしよう！！来月には、12ブロックの試合もあります。試合が楽しめるよう、練習がんばろう！！

by 尾川コーチ

代表復帰長友



走り込み充実

左の翼が帰って来た。親善試合ブルガリア戦(30日)、ワールドカップ(W杯)アジア最終予選・豪州戦(6月4日)に備えて愛知県豊田市で合宿中の日本代表に、DF長友(インテル・ミラノ)が負傷から3カ月ぶりに復帰している。左サイドの攻守に欠かせない26歳は、最後の一人になるまで練習場を走っている。

合宿初日の26日、ザッケローニ監督から「(痛めた)左ひざの具合はどうだ？」と話しかけられ、「問題ありません」と答えた。連日、全体練習後の走り込みを欠かさない。

左ひざ「問題ありません」

「どンドン状態を上げたいから」2月のラトビア戦後、イタリアで負傷した。3月のW杯予選・ヨルダン戦は「歯がゆく、悔しい」思いを抱えながらテレビ観戦した。1-2で敗れた戦いぶりについて、厳しい目を向けた。「1対1の攻防で負けていた。相手を甘く見た部分があったのでは」

だからこそ、豪州戦の勝負の分かれ目は「戦術や技術ではない。勝ちたい思いをどこまで強く持てるか」だと考える。持ち味の気迫あふれるプレーで、W杯への道を切り開く決意だ。(中川文如)